



津波多発地域に昔から伝わる「てんでんこ」の教訓をどう受け止めた方がいいのか。災害時の人間の心理や行動を基に防災を研究している兵庫県立大の木村玲欧准教授に聞いた。

(聞き手・林勝)

「一目散に逃げよという「てんでんこ」は正しい行動ですか。現代においても、とても有効な考え方。自分の命を守らなければ、ほかの人も救えない。それでも、多く

兵庫県立大

木村玲欧准教授

「教訓をどう生かす」識者に聞く

の人が助けを求める人を残して逃げられなかった。

救われた命もあったが、失われた命もあったことを忘れてはいけない。岩手県宮古市では消防団員

いいのか。もしものときに自分一人で命を守れない人が、災害の危険が高い場所に住むこと自体が大きナリス

ク。実際には弱者を見捨てられない

危険性の認識必要

が逃げ遅れた人のため、いったん閉めた堤防の水門を開けたことで時間をとられ、救助側の十数人が亡くなった。

「緊急時に一人で動けない高齢者や障害者の問題をどう考えたら

い人も多く、周りの人の命を危険にさらしているともいえる。とはいえ住む場所は自助努力では難しい面もあるので、このような状況を許している社会の認識を変えていくことが必要だ。

「日本は災害多発国なのにリスクを適切に認識していないのか。

人は未知のものや発生確率の低いリスクを低く評価してしまう。しかし、巨大地震は取り返しのつかない被害を与えるので、その危険性を継続的に伝え、学ばなければならぬ。個人個人では、健康診断で病気のリスクを判断するよ

うに、防災訓練に参加したり、行政のハザードマップを確認したりしてリスクを認識してほしい。その上で自分の命を自分で守る行動について、家族で話し合うのもいいだろう。

「防災訓練に参加しない人は多い。大人の認識を変えるのは難しいが、子どもは違う。「助けられる人から助ける人へ」という意識を育てる防災学習に取り組んできた岩手県釜石市の釜石東中学の生徒らは、津波の危険を的確に察知して高台に避難。校舎は最上階まで津波にのまれたが全員無事だった。

生徒らはその後、被災者の安否確認のため、避難所で名簿づくりをするなど地域のために活動した。社会に防災意識を根付かせるには、子どもへの教育が最も大切だ。